議会改革短信　第39号　　田辺優子

# 女性議員が増えると議会も社会も変わる
# 多様性を尊重する開かれた議会へ

北海道新聞の報道（二〇二〇・三・七）によると、石狩管内八市町村議会の女性議員の割合は、前回（二〇一五年）改選時の二二・三%から二九・二%と確実に増加していることがわかりました。要因についてははっきりと言及できませんが、女性議員の活動が普通に市民に認識され、評価されてきたことではないかと考えます。

私は、昨年（二〇一九年）の春まで、三期一二年、北広島市議会議員として活動してきました。二〇〇七年、初当選した一期目は、二七名の議員中、女性は私ともうひとりの二名だけでしたが、二期目は一気に五名に増え、三期目は私の所属する市民ネットワーク北海道が複数化に成功したこともあり、二二名中七名と女性議員比率が三〇%を越えました。

順調に女性議員が増えていった印象がありますが、以前の北広島市議会においては、議会のあるフロア（旧庁舎）に女性トイレがないことに象徴されるように、政策決定の場に女性の参画は少なく、長年男性中心に運営されていました。前述の記事の中では、三割の女性議員が政治活動中に女性であることで差別や批判を受けた経験があると回答しています。私が議員になってからも、懇親会等での卑猥な発言や、未婚の女性議員に対し、結婚して子どもをつくったほうがいいと発言する男性議員が存在することに驚きました。これは議会に限ったことではなく、日本における女性の社会的地位が依然として世界でも最低水準にあるひとつの事例ではないかと考えます。

私が所属する市民ネットワーク北海道は女性ばかりの地域政党で、生活する中で見えてきた課題に声をあげ、解決する仕組みをつくるために身近な議会に女性を送り出してきました。しかし、女性が議員に立候補することのハードルは高く、これまで様々な条件をクリアし、本人に意欲があっても最後には、家族の反対で実現できなかったことが何度もありました。これは、家事はもちろん子育てや介護など家庭生活における女性の役割が重く、議員活動との両立が困難なことや政治は男の仕事という固定観念が根強く存在し、女性が政治活動に参加することへの抵抗感が原因と考えられます。

女性議員を増やすためには、社会の意識を変えることに加え、子育てや介護中であっても議員活動をつづけることができるよう、育児休暇や介護休暇が取得できることや必要な知識を得るための研修会の充実など様々な環境整備が必要です。二〇一八年には、「政治分野における男女共同参画推進法」が施行され、クォータ制やパリテ法など女性議員を増やす試みも検討されていますが、選挙制度の壁や逆差別になるとの反発など、実現は難しくまだまだ世界の水準には、遠く及ばないのが現実です。

私感ですが、北広島市議会では、およそ三分の一が女性議員となったことで、これまで閉鎖的な印象のあった議会という場が、風通しのよい開かれた場となった印象があります。女性議員七名のネットワークを駆使した活動には、多くの方から期待と励ましの声をいただきました。また、介護や子育てなど身近な課題を取り上げることで、本会議、委員会に関わらず、傍聴者も増えました。

これまで政治の世界は圧倒的に男性が多く、どちらかというと経済優先の流れが強いものでしたが、少子高齢化がすすむにつれ、子育てや介護の問題が深刻になったのをはじめ、ごみや食の安全など生活と密接に結び付いた問題を解決するためには女性の視点が欠かせないことが認識されています。また、虐待や貧困など困難を抱える女性の声を代弁するためにも女性議員が必要です。

議員は何をやっているのかわからないという市民の厳しい目に向き合うためにも、女性たちのしなやかなネットワークを活用した発信力が期待されます。多様な市民の声を政策に反映させるために、世の中の構図と同じように、女性や未来を担う若者が政治に参加しやすいしくみの構築が急がれます。少数意見を排除するのではなく、多様性が尊重される開かれた議会に変わっていかなければ、人口減少や地球温暖化をはじめとする世界的な課題に対処することはできません。多くの女性が勇気をもって政治の世界にチャレンジすることができるよう、まずは女性たちの応援の輪を広げていきましょう。

＜たなべ　ゆうこ・前北広島市議会議員＞